

「男、突っ走る！」

第87回

第一稿

作・壽倉 雅



1 南公民館・廊下

雅也、茜、愛花が話している。

雅也「え……」

愛花「ごめんなさい……」

茜「まさか、むぎまで……」

雅也「他の舞台公演の本番が被っちゃったと  
なると、いずれにせよ、どちらかを優先し  
なきやいけないよね……」

愛花「その公演、私が豊田で受けてる演劇ワ  
ークショップの発表会公演なの。一年の集  
大成でやる作品で、みんな出演するの」

雅也「そっか……」

茜「一年の集大成だと、出ないわけにはいか  
ないもんね」

愛花「大晦日のカウントダウンイベントは、  
みんなと一緒に出演するから」

茜「さすがに、そこは他の行事と被らないも  
んね。まあ、むぎ以外にも、演劇祭に出演  
できなくなったらレイナも出演できるように  
なったみたいだし、何も出ないこと考えた

らね」

雅也「まあね……。逆に、ショウは年末年始に実家の岩手に帰るから、演劇祭一本に絞るみたいだし。マイキーも、大晦日は友達との旅行でこっちにはいないって言うてたから、まあそれぞれ事情があるものはしようがないか」

茜「（愛花に）分かった。もう行って良いよ」  
愛花、頷くと去っていく。

雅也「また降板か……」

茜「タイミング悪いよね」

雅也「キャスト都合で、脚本直すがどんなに大変か」

茜「キャストを入れ替えるだけならまだしも、登場人物一人減らさなきゃいけないんだもんね」

雅也「うん」

茜「これで、何人消した？ 登場人物」

雅也「えっと、シノブの役とレイコ姐さんの役とレイナの役とむぎの役だから、四人分

か」

茜「四人も登場人物いなくなって、ストーリー成立するかな。また配役変更になるんじゃないの？」

雅也「ただ、幼馴染のメイン三人は変わらず、ミオとコウタととみーで行く。配役変更というよりかは、元々の配役でやる役割を今のメンバーに振り分けるような形になるかも。もちろん、セリフが増えるっていう負担はあるけどね」

茜「結局、演劇祭本番に出れるのは、私とコウタとミオとナオとマイキーとショウとジュリとミドリさんの八人か」

雅也「こんなにメンバーいるのに、演劇祭出るのが八人か……」

茜「うっちー、だいじょうぶ？」

雅也「仕方ないでしょ、直すしか。稽古だつて進んできてるのに、今になって、キャスト少なくなつたから、演劇祭出ませんってわけにはいかないじゃん」

茜「そうだけど……」

雅也「ごめん、あんまりキャストのモチベーション下がるような発言はしないほうが良いね。出れる人だけで、頑張ろう」

茜「うん……」

## 2 同・大会議室

カウントダウンイベントの稽古が行われている。

台本を持って読み合わせをする雅也、佐代子、山中、浩太、直海、茜、美央、怜奈、緑、愛花、寿梨——演出の指示をしている阿川。

× × ×

阿川から振付を教わりながら、踊っている一団。

N 「昼から夕方まで演劇祭の稽古が行われ、休憩を挟んで夕方から夜まではカウントダウンイベントの稽古が行われました。運営とメンバーの一体感を見せるためという国

枝さんの意向で、僕やヤマさん、国枝さんも、カウントダウンイベントには端役ながらも出演することが決まり、一同様々なものを掛け持ちしながら稽古する日々を送っていました。市民演劇祭の演出や、名ばかりの運営代表という精神状態の中、カウントダウンイベントは幸いにもセリフが三行程の出番だったので、そこまでの負担にはならず済みました」

### 3 カラオケ店・表（夜）

N 「それからしばらく経ってから、僕たちはカウントダウンイベントに使用する音源データを録音するために、カラオケに集まることになりました」

雅也、山中、阿川、緑が待っている。

山中 「うちー、最近演出は上手く行ってるか？」

雅也 「そんなわけないじゃないですか。一気に四人もメンバーが演劇祭に出れなくなっ

て……キャスト都合による脚本修正が一番大変なんですから。まあ、仕事でもそういう経験はありましたけど、今回は演出も兼任してますからね、精神状態がおかしくなりそうですよ。それに、まさかカウントダウンイベントにも出演するなんて思い込んでましたしね」

山中「しょうがないだろ。総合プロデューサーの判断なんだから」

阿川「だから、うちーとヤマさんの出番は少なくなるような脚本にしたんです」

雅也「すいません、お気遣いいただいて」

緑「うちーやヤマさんの負担、国枝さん考えてるんですかね。私は、そっちのほうで気がかりで」

雅也「……」

阿川「代表がうちーとはいえ、総合プロデューサーは国枝さんでしょ。だったら、運営のフォローをちゃんとするのが国枝さんの仕事なんじゃないですか？ 仕事をポン

ポン持ってこれば良いってわけじゃないと  
思いますけど」

雅也「僕は所詮名前と責任を負うだけの代表  
ですからね、何も言えないんですよ」

緑「うっちー……」

山中「遅いな、みんな」

雅也「僕待ってますから、よろしかったら皆  
さんお先に」

阿川「そう？　じゃあ、先行きますか」

山中「うっちー、後よろしくね」

と、中へ入っていく山中、阿川、緑――  
――雅也が少し待っていると、浩太と茜  
がやってくる。

浩太「ごめん、うっちー」

雅也「あ、コウタ、とみーに送ってもらった  
んだ。連絡なかったから、てっきり駅から  
歩いてくるかと思っちゃった」

茜「私がちょうど、駅を通ってくから、つい  
でに浩太乗せてきたの」

浩太、羽織っていたコートを脱ぐと茜

に渡す。

浩太「寒くて、とみーの上着借りてたんだ」

雅也「ああ、そういうこと」

茜「みんなは？」

雅也「ヤマさんと阿川さんとミドリさんは、  
もう中入ってる。国枝さんと田所さんは、

まだ」

浩太「俺たちも先入っちゃおうぜ」

雅也「良いかな、待ってなくて」

浩太「良い良い、もう入っちゃおう」

と、促されて茜と浩太と共に中へ入っ  
ていく。

#### 4 同・一室

おとぎ話や童話の歌を歌っている田所

と雅也——傍らに佐代子、山中、阿川、

緑、浩太、茜。

雅也「どうもうまく歌えないですね」

田所「うちーはね、若干キーがずれてる」

雅也「そうなんですか？」

佐代子「うっちー、歌ってて分からない？」

雅也「まったく」

山中「うっちーは、ひたすら歌詞を読み取る

方に意識が向いてるんじゃないですかね」

雅也「多分、そんな余裕もないと思います」

浩太「俺も偉そうなこと言えないけど、本当

に歌って難しいよな」

緑「短い一曲でも、歌は歌だもんね」

佐代子「ちよっとここで、皆さんにお知らせ

があります」

雅也「お知らせ？」

佐代子「このメンバーだからここだけの話に

してほしいんだけど、今日市役所へ呼ばれ

たの」

山中「市役所？」

佐代子「実は、観光協会からの委託事業で、

沖島友さんの小説を原作にしたミュージカ

ルをやってくれないかって相談を受けて」

茜「沖島友さんって、この地元在住の小説家

さんですよ。私、何作か持ってます」

佐代子「来年の夏の商店街の祭りに合わせて、企画を進めてるんだって。もちろん、キャストは『スリジエネ』だけじゃ限界があるから、一般からキャスト公募をする予定。まだ詳しい話は決まってるけど、とりあえず概要はこんなところですよ」

山中「すごいじゃないですか」

雅也「……」

阿川「このあたりで、市民ミュージカルが広がると良いですね」

佐代子「なので、ぜひ皆さんご協力お願いします  
ます」

田所「楽しみね。私、何でもやっちゃおうわ」

雅也「……」

茜「（雅也の顔色を気にして）はい、じゃあ大きなプロジェクト進むことを記念して、歌います！」

音楽が流れ、マイクを持って歌う茜――  
――黙然としている雅也。

5 ファミレス（夜）

山中、茜、浩太が話している。

山中「そっか。東京行きたいのか」

茜「はい。内定もらったところは、関東にも支社があって四月から三ヶ月間の研修を受けた後に、配属先が決まるんです。なので、その時にも関東を希望しようかと思って」

山中「せっかくの機会なら、東京に行ってみるのも良いぞ。ある程度区切りがいたら、俺みたいに戻ってくる選択肢もあるんだから」

茜「ええ。ただ、今日国枝さんから話の合った市民ミュージカルは、出てみたいかなとも思ってるんです」

山中「沖島優さんの小説が原作だからな」

茜「はい」

山中「（浩太に）コウタは、これからどうしたいのかって希望はあるのか？」

浩太「一応、エキストラだったり、映画のオーディションは受けてます。俺も、どこか

のタイミングで東京に行こうかなって考えてるんです。そりゃ、俺も市民ミュージカルは出たいって思いますけど」

山中「そっか」

茜「ただ、あの場で発表したのは、どうなんだろうって思いましたけどね」

浩太「俺も思った」

茜「でしょ」

山中「あの反応見る限り、うっちはー何も聞かされてなかったみたいだもんな」

茜「立場上は代表でも、結局ああやって話を持ってきたり、色々決めるのは国枝さんなんです。うっちはー見てて、可哀想の思えましたよ」

浩太「後半、うっちはーほとんど黙ってたもんな」

茜「最近、うっちはー口数減ってるよね。『七夕物語』の時はさ、明るくてみんなを和ませるポジションだったのに、今なんてすっかりやつれちゃってさ、こっちのほうが心

配になってくる」

山中「運営とメンバーの板挟み、代表としての重圧、初めてで上手くいかない演出……そりゃ、うちーのテンションも下がるわな」

浩太「このまま、うちー本番まで大丈夫かな」

険しい顔の一同。

## 6 木内家・居間（夜）

真保が台所で食器を洗っている——健

次郎がテレビを見ている。

雅也が帰宅する。

雅也「ただいま」

真保「おかえり」

健次郎「おかえり」

雅也「お風呂沸いてる？」

真保「もう沸いてるわよ」

雅也「じゃあ、風呂入ったらもう寝るわ」

真保「ああ、雅」

雅也「何？」

真保「（健次郎に）健、お兄ちゃんにちゃんと言わなきゃ」

雅也「どうしたの？」

健次郎「新しい仕事、決まった。コンビニのアルバイト」

雅也「そっか。前は製造業だったけど、接客業やってみるのも良いかもね」

健次郎「まあ、やってみなきゃ分かんないけどさ」

真保「ハローワーク行ったり、求人票見たりしてても、全然自分の中で合うような仕事がなかったみたいだね。まあ、コンビニのアルバイトだから、シフト制で出勤時間もバラバラだけど何もしないこと考えたらね」

雅也「今度は、長く続くと良いね」

健次郎「ああ」

雅也「じゃあ、風呂入ってくる（と出ていく）」

健次郎「兄貴、何か疲れてるみたいだな」

真保「『スリジェネ』の活動、結構大変みたいだからね」

7 同・雅也の部屋

ベッドにダイブするように横たわる雅也——大きな溜息をつくとき、そのまま目をつむる。

8 同・全景（朝）

9 同・雅也の部屋

プリンターから、デザイン案の紙がプリントされている——雅也、それを手にすると、赤ペン片手にチェックをする。

N 「市民演劇祭やカウントダウンイベントを控える一方、僕は地元のフリーペーパー

『デイズ』の秋号発行に向けての準備を進め、何とか完成までこぎつけることができました」

雅也、赤ペンの手を止めて振り向くと、  
積まれた木箱を見つめる。

N「そう、まだ木箱は完成していませんでした。まだここに、ペンを塗るという作業も控えていたのです」

10 中央公民館・全景（数日後・夜）

11 同・工作室

雅也、山中、阿川、浩太、昇平、啓司、  
茜、直海、美央、緑、寿梨が、それぞれブルーシートの上に乗せられた木箱に白いペンを塗っている。

雅也「一面だけは黒く塗るから、間違えないようにね」

浩太「はいはい」

啓司「上手く塗れるかな」

昇平「こういう時、誰か一人はひどく汚すんだよね」

寿梨「ミオ、汚しそう」

美央「失礼な。私、ちゃんとやります」

茜「あれ、それフラグ？」

美央「違いますう」

緑「ほらほら、手を動かしなよ」

美央「はい」

山中「ムラのないように塗るんだぞ」

阿川「木の細かい棘があるかもしれないから、  
気を付けてね」

一同「はい」

雅也がペンキを塗っていると、山中が  
隣に来て、

山中「うちー、大丈夫か？」

雅也「何がですか？」

山中「この間のこと。国枝さん、うちーに  
何の相談もなく委託事業の話したから」

雅也「ああ、もうあのことは気にしてません」

山中「え？」

雅也「結局僕は、名前だけで何かあった時に  
責任を取るために代表っていう肩書に位置  
付けられてるんだって、開き直すことにし

ました」

山中「うっちー…」

雅也「『スリジェネ』は、国枝さんが作ったものなんです。どんな企画を持ってきて、どんなふうに進めるのか、それは国枝さんが決めれば良いんですよ。結局僕には、決定権だっていないんですから」

山中「…」

阿川「うっちー、BGMと照明って決めた？」

雅也「え？」

阿川「そろそろ通し稽古始まるでしょ。決めとかないと。それに、うっちーが当日は音響オペやらなきゃいけないだろうし」

雅也「あ…：…そうですよね…」

阿川「早めに決めときなよ。特に、BGMは早急に」

雅也「分かりました」

山中「うっちー。とりあえず、音源の候補をいくつか出しといて。あと、どの辺りで音源を使うのか、脚本に書き込みもしといて。」

候補出してくれたら、俺が決めるよ」

雅也「けど、ヤマさんだって、ご自分の劇団の方があるじゃありませんか」

山中「音決めるぐらいなら、そんなに時間かからないから大丈夫だって。うっちーもタスク多くて大変だけど、何とか乗り切ろう」

雅也「はい……」

## 12 同・駐車場

雅也、直海、美央が話している。

雅也「ナオは良いの、もう帰らなくて」

直海「ミオの迎えが来たら、私も帰る」

美央「ありがとう、ナオ」

雅也「ナオ、帰り自転車でしょ。早く帰った方が」

直海「うっちーは、何かあったときの責任が怖いんですよ」

雅也「そりゃ、代表だからね……」

直海「何の権限もない代表なんて、辞めたら良いのに」

雅也「ナオ……」

直海「代表になってから、うちーが前のうちーじゃないような気がしてる」

美央「私もそう思う。『七夕物語』の時は、もつと元気だったもん」

雅也「……」

直海「この際、国枝さんに全部任せちゃったら。『スリジェネ』作ったのは、国枝さんなんだもん。何もうちーが全部責任を負う必要はないと思うけど」

美央「本来のうちーに戻るんだったら、そういうのも良いかもね」

返す言葉もなく黙っている雅也。

つづく